

WILL 2 LIVE 映画上映会開催を通しての学び

—運営そして参加者の立場から—

坂本 緋音

【学生レポート2】

WILL 2 LIVE 映画上映会開催を通しての学び —運営そして参加者の立場から—

長崎大学多文化社会学部 4年 坂本 緋音

本稿では長崎大学学生団体 STARs による WILL 2 LIVE 映画上映会の開催に向けて企画・準備を行い、そして開催日当日は STARs の一員として活動したことを通じて、私が何を学んだのかについて記したい。

私たち STARs のメンバーは、カナダに住むロヒンギャ難民が自身のミャンマーでの迫害経験を劇として演じる物語「アイ・アム・ロヒンギャ」を上映した。初めに映画上映会の開催に先駆け、STARs のメンバー同士でロヒンギャ難民について勉強会を開催し、実際にミャンマーを訪れた経験のあるメンバーからロヒンギャ難民の問題についてだけでなく、現地の人々がロヒンギャ難民の人々にどのような感情を抱いているかなどを教わりロヒンギャ難民について理解を深めた。

2021年4月25日、オンライン開催だが WILL 2 LIVE 映画上映会を開催した。今回の上映会のメインイベントは映画「アイ・アム・ロヒンギャ」の上映である。これはカナダで制作された映画で、カナダに移住したロヒンギャ難民の人々がミャンマーでどのような迫害にあっていたのかを、人々の前で劇として演じる物語だ。自分たちが経験してきたことを劇として多くの人々に伝える難しさ、そして劇として演じることで演者である彼らが改めて感じるロヒンギャとしてのアイデンティティ、など難民として母国を離れカナダで生活している彼らしか伝えられないメッセージがある。難民問題はテレビなど報道上の世界でしか想像できないことも多いが、劇に描かれるまでのドキュメンタリーを見ることで実際の難民たちの生活と現在の私たちの生活とを身近に感じることができ、移住先での難民の生活という新たな側面で難民問題について考えさせられる契機となった。

上映会当日の流れは、開会式、アイ・アム・ロヒンギャの上映、上智大学教授で近現代ビルマ史を専門にしている根本敬先生による講演、質疑応答、閉会式であった。また、本編の終了後にはアフタートークとしてディスカッションや根本先生による質疑応答のコーナー、休憩時間にはロヒンギャ難民の写真を撮っている写真家の新畑克也さんや狩新那生助さんの紹介、そして難民に関するミニ企画も行った。

根本先生による講演会では、映画の感想を踏まえながらロヒンギャ難民の描かれ方、特に彼らの宗教について歴史や対立に関する様々な示唆を得ることができた。私自身ロヒンギャ難民というと、イスラーム教徒と仏教徒との宗教対立から生まれた迫害という印象をもっており、映画の中からも「イスラーム教」対「仏教」の構図を組み取っていた。しかしロヒンギャの人々を迫害する仏教徒という表現が強調されすぎているために、実際のロヒンギャの人々の迫害を宗教対立という枠組みでしかとらえられていないという点が批判的に講演で挙げられていた。映画の中ではあまり描かれていなかった「民族」という考え方がロヒンギャの人々に対する排他的感情を生み出し、その背景には近代に制定された法律の影響があるものの歴史的な関係は無視されているということ、ロヒンギャ迫害について認識するためには必要ということだ。善と悪という二項対立的に物事を捉えるのではなく、その背景まで理解することは難民問題だけでなく、すべての物事に繋がっていくと思った。また根本先生の講演会では映画では描き切れなかったロヒンギャ問題の根本を学ぶことができたと思った。それは私だけでなく、講演会を通してロヒンギャ難民の歴史や現状など映画を見た以上に考えを深められたと書いてあるコメントが多くあったことから、多くの参加者の方々も同じ思いを抱いたように感じる。

閉会式後に行われたアフタートークでは、参加者の方々と直接意見を交換することができ学生だけではなく、群馬県で暮らすロヒンギャのサポートに携わっている方やミャンマーに関するお仕事をされている方などとの交流から新たに学ぶことが多かった。特に我々STARsのメンバーの多くは多文化社会学部の学生で、ディスカッションの際には似通った意見が出てくる機会も多いが、様々なバックグラウンドを持つ方々の意見を聞いたことは我々運営側にとっても良い刺激になったと思う。初対面の人同士が、難民問題という深いトピックをディスカッションしていくことに、「難しくないだろうか」、「運営としてきちんと意見を促すことができるか」と心配に思っていたが、それは杞憂だったと思うほど活発な議論が展開された。そしてディスカッションの後は、ディスカッションチーム内で生まれた疑問などを直接根本先生に伺うことができ、つい数分前に抱いた疑問の解決の糸口を教えていただける贅沢な時間だったと思う。

私たちが開催したWILL 2 LIVE 映画上映会では参加者の方に難民問題について知ってほしいとの思いから、様々なことを企画し、開催によってこの思いは実現したと思う。しかし何より、映画上映会開催に向けて難民やロヒンギャに関する勉強会を開催したり、イベントのためのミーティングを何度も行ったりとSTARsのメンバーにとっても一つのイ

イベントを通して学べたことは多くあった。コロナ禍で開催が延期されたり、対面開催からオンライン開催に変更されたりと WILL 2 LIVE 映画上映会開催に向けても多く状況の変化があった。特にオンライン開催と決まってからは、写真展などのコンテンツをどのようにオンラインにシフトするかという企画面や、ZOOM 配信でのイベントの開催など技術面に関して何度も話し合いをした。この困難な状況の中でも「絶対に開催したい」という強い情熱とともに行動し、たくさんの企画を実現させたメンバーに同じ学生ながら尊敬の念を抱かずにはいない。私自身 WILL 2 LIVE 映画上映会に STARs として参加したことで、難民についてだけでなく、ゼロからイベントを企画し運営していく難しさも学ぶことができた。今回の WILL 2 LIVE 映画上映会は成功したが、一回限りでは意味がないので、今後も継続的に多くの人々に難民問題を知ってもらえるような活動をしていくことが課題となる。目標の実現のために、これからも STARs としての活動に励んでいきたい。